

ホセア書10章12節 「熱心に主を求める時」

1A 霊の鍛錬

1B 種まき

2B 耕地の開墾

2A 主の来られる時

1B 今、主を求める

2B 恵みの雨

本文

ホセア書 10 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは、ホセア書 7 章まで来ました。午後礼拝で 8 章から 11 章までを網羅してみたいと思いますが、今朝は 10 章 12 節に注目します。「**あなたがたは正義の種を蒔き、誠実の実を刈り入れよ。あなたがたは耕地を開拓せよ。今が、主を求める時だ。ついに、主は来て、正義をあなたがたに注がれる。**」預言者ホセアは、偶像礼拝の中に陥っているイスラエルが、今にもアッシリヤによって滅ぼされそうとなっている時に、この神の言葉を語りました。滅ぼされることを目に前にしていたイスラエルであっても、今、主を求めれば、悔い改めれば、正義を注ぐと言われます。神の恵みを注いで救われると約束されている箇所です。しかし、興味深いのは天から恵みの雨が降っても、もしその土地に用意がなければ、無用の恵みになってしまいます。土地が初めから耕され、種が蒔かれているからこそ、そこに作物を実らせることとなります。同じように、主が恵みを上から注ぐにしても、その恩恵を恩恵として無駄にせず受けられるのは、しっかりとした種まきと土地の耕しがあってこそのことだ、ということです。

1A 霊の鍛錬

私たちは、今していることが積み重なって後々に日の目を見るのが数多くあります。悪いこともそうですし、良いこともそうです。先週、105 というお歳で天に召された日野原重明さんという方がおられますが、聖路加病院の名誉院長であり、キリスト者でした。いわゆる「生活習慣病」というものを名づけた生みの親と呼ばれています。生活で習慣にしているものが、後々に症状となって出来るので、その習慣を変えようという意識が生まれてきました。

1B 種まき

霊的においても、同じ原則を見いだせます。パウロは預言者ホセアを同じく、種蒔きと刈り取りの原則を語っています。「ガラテヤ 6:7-8 **思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。**」自分の肉のために種を蒔けば、滅びを刈り取ります。けれども、御霊のために蒔けば、御霊によって永遠の命を刈り取ります。私たちが、日頃から日常的に神の御霊に関する事柄、すなわち祈りと御言

葉、そして信者との交わり、神への賛美に関わるのであれば、そこから神が永遠の命を刈り取ります。パウロはこれを、競技選手に喩えて、「敬虔のための鍛錬」と呼びました。「1テモテ 4:7-8 俗悪な、年寄り女がするような空想話を避けなさい。むしろ、敬虔のために自分を鍛錬しなさい。肉体の鍛錬もいくらかは有益ですが、今のいのちと未来のいのちが約束されている敬虔は、すべてに有益です。」ここでも、いのち、永遠の命が敬虔のための鍛錬の結果、与えられる約束として書かれています。

二年前の六月に行った葬儀セミナーにおいて、キリスト教葬儀社の社長さんが、ご自身の息子さんが野球チームに入っていることから、次のような表現を使いました。「素振りが大事なんです」そう、野球の試合で何かテクニックによって打てるようなものではなく、日頃の素振りがあるからこそ、いざという時に適切な打撃をすることができるというものです。同じように、仏式の葬儀について、偶像礼拝との関わりをどのように避けるべきかについて、その時にどうすればよいかをその時になって考えるのは遅すぎであり、日頃からキリスト者としての証しを立てているからこそ、咄嗟に何をすべきかを判断し、行動に移せるということです。

ここでホセアは、「**あなたがたは正義の種を蒔き、誠実の実を刈り入れよ。**」と言っています。正義の種を蒔いていれば、誠実の実を刈り取ることになります。正義とは、ここでは「神ご自身の義」であり、また「神との正しい関わり」であります。新共同訳では「**恵みの業**」と訳されています。これは、つまり自分が正しい行いをするというような自分中心の行為ではなく、神の正しさ、また神に信頼して生きる場所にある正しさを話しています。神の言われることを信じて受け入れて、神が恵みをもって私たちの内で、また私たちを通して働いてくださるということを目指しています。神ご自身の働きに、神ご自身の御業に自分が積極果敢に関わっていくということです。そして、「**誠実**」という言葉はヘセドであり、「**真実な愛**」「**契約に基づく愛**」ということです。そうです、神の事柄に関わっていけば、それによって自ずと神への愛、また兄弟や隣人への愛、誠実さにつながっていきます。「1ヨハネ 4:7 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。」神から生まれ、神を知っているのだから、神を愛します。そして神の愛の中にいるのだから、兄弟も愛するのです。神を知っているながら、兄弟を憎むことはできません。神の愛の中にいるなら、兄弟を愛しているし、兄弟を愛しているなら、それは神の愛が流れ出ているからです。このように、正義の種を蒔くと、誠実の実を刈り取ります。

農耕というのは、私たちに忍耐が必要であることをよく表しています。「ヤコブ 5:7-8 こういうわけですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、秋の雨や春の雨が降るまで、耐え忍んで待っています。あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです。」種を蒔いたところで、すぐに実が結ばれるわけではありません。むしろ、日頃から、種を蒔いた後の世話がとても手間がかかります。動物のペットを飼っておられる方であれば、分るでしょう。いや、人間、小さな子供をお持ちのお母さんは分るでしょう。育つまでには時間がかかり、手間がかかります。私たちが、地道に正義の種を蒔いたところ

で、すぐにそのまま成果が出て来るわけではないのです。けれども、手間がかかります。いろいろなことを霊的な成長のために犠牲にしないといけません。自分の霊について、世話をしなければいけません。ですから、信仰と忍耐が必要です。しかし、確かに実を結ばせるのです。表面的ではなく、本当に信じた人について、グレッグ・ローリーがこのように言いました。「しかし、本当に信じる人もいます。最初は、将来性があるようには見えないかもしれません。すぐに深い「回心」を得ないかもしれません。初期の成長はドラマチックではないかもしれませんが、時間が経てば、この人たちの信仰が真実であることが明らかにされます。」

そして、種蒔き、農作には「時」があります。どんなに自分が時を早めようとしても、そんなことはできません。収穫の時というものがあり、その時が来るまでは成長を早めることはできないのです。時を支配することによって、神は私たちが神を求めることができるようにしておられます。「伝道者 3:11 神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。」したがって、私たちは「これだけのことを投資したのだから、これだけの成果が出てくるのだ」という人間主体の考えを持つてなくなるのです。私たちは時にがっかりすることでしょう、どうして何も起こっていないかのように見えるのだと思うでしょう。時が満ちるまで主が待っておられるのです。ですから、主の定められた時の中で生きるのです。主がなされることなのですから。

イスラエルの民には、七十年という時がありました。ユダの国がバビロンに捕え移されて、七十年の捕囚の期間があり、それでようやく帰還することができます。彼らはすぐにでも戻るができるのだと願いましたが、確かにそのように二・三年後に戻るのだという預言者たちがいました。しかし、彼らは偽預言者でした。七十年の期間が必要だったのです。その間、無駄にはしてはいけません。彼らは種蒔きを、自らの魂にするという務めがあったのです。「詩篇 126:5-6 涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰って来る。」自分たちの犯した罪、先祖たちが犯した罪について悲しみ、悔い改める時がありました。けれども、だからこそ七十年経ってから、喜びをもって帰還することができたのです。泣きながらエルサレムを出て行った者たちも、神の言葉という種を抱え、それを心に植えていたので、七十年後には喜び叫びながら帰ることができたのです。

2B 耕地の開墾

そしてホセアは、「**あなたがたは耕地を開拓せよ。**」と言っています。新共同訳では、「**新しい土地**」と訳されています。新しい土地にしても、また長い間、荒廃していて、まるで耕作したことのないかのようにまで堅くなってしまった土地も、新しい土地ということができるでしょう。たとえ、私たちが熱心に心に種を蒔いても、その心自体が堅ければ、どんなに種を蒔いても実を結ばせることがありません。事実、イスラエルの民は「かたくなな雌牛のようになくなだ。(4:16)」と呼ばれていました。ハガイ書において、「あなたがたは、多くの種を蒔いたが少ししか取り入れず(1:6)」とあります。何度となく聞いているのに、それでも実を結ばせていないのは、その土地が堅いからです。私たちが心堅くしているなら、どんなに御言葉を聞いても実を結ばせることはありません。

なんで、心が堅いのでしょうか？それは、イエス様の四つの種類の土の喩えの中に、分かり易く表れています。同じように御言葉を聞いているのですが、実を結ぶ人とそうでない人に分れるのです。四つのうち、第一の道端に落ちた種は、そもそも聞いてもいません。鳥が来て食べてしまうのですが、悪魔が来てその人の心から取り去ってしまいます。その人は聞く耳を持っていません。けれども、聞いているのに実を結ばせないことがあるのです。第二の土が、岩地です。そう土はあるのですが、とても浅いです。ですから、日が出ればすぐに芽を出すのですが、根がないから枯れてしまいます。これが、心の頑なさを表しています。感情的に御言葉を聞いているのです。表面的に聞いています。心の中にしっかりと受け入れていません。御言葉に傾聴して、それに従おうとすれば、困難があります。迫害さえあります。けれども、それを避けたいので御言葉から離れてしまいます。初めから聞いていなかった人と同じようになってしまうのです。そして、第三の土は、いばらの中に落ちました。それで芽を出すのですが、いばらがその成長を塞いで実が結ばれないようにするのです。これは、心に思い煩いや富の感わしがあるからです。自分の生活をきちんとやっていたかなければいけない、あるいは、自分にはただ神を信じる以上の可能性があるはずだと思って、富を与えて祝福してくださる神を第一にするのではなく、富そのものを求めてしまいます。またいろいろな思い煩いをして、それをやることに精一杯になって、そちらを優先してしまいます。それで、せっかく御言葉を聞いているのに、実が結ばれないのです。ですから、新しい土地の耕作には土地を耕して柔らかくするだけでなく、雑草も抜かなければいけませんね。心から、雑草を抜く必要があります。

けれども、みことばを聞いて受け入れる人は、三十倍、六十倍、百倍の実を結びます。このように、たゆまぬ努力が御言葉を聞くときに必要です。しっかりと受け入れる努力です。自分のこととして聞いていく努力です。実生活にどのように当てはまるのか、考え抜く努力です。このことをペテロは第二の手紙で、このように話しました。「2ペテロ 1:5-8 こういうわけですから、あなたがたは、あらゆる努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、あなたがたは、私たちの主イエス・キリストを知る点で、役に立たない者とか、実を結ばない者になることはありません。」実を結ばない者にはならない、とありますね。

2A 主の来られる時

ですから、私たちは努力が必要なのですが、それは自分の力ではできません。むしろ、自分がこれをやりたいと願っているその力を神にお捧げするのです。自分に出会ってくださった主に、自分は日毎に、朝毎に、この方の前に出て行くのです。そして、その御言葉を聞いて、心を清めていただきます。無力な私たちは、神の前にへりくだるしかありません。しかし、そのようにしっかりと心の整え、御言葉による種蒔きを丹念に行ない、実を結ばせる生活を歩んでいる中で主は、上からの恵みをくださいます。「**ついに、主は来て、正義をあなたがたに注がれる。**」と言われますね。主が御霊によって正義を降り注いでくださるのです。

1B 今、主を求め

ここで大事なのは、「**今が、主を求めるときだ**」と言っているところです。主が何も事を行われていないのだから、時が来ていないと思っていたらそれは誤りです。むしろ、自分が主を求めのをやめた時から、主が働きをご自分の中で留めておられるだけであって、自分が求めているので主が関わっておられないというだけなのです。ハガイ書の中に、そのことが書かれています。「1:2,4 この民は、主の宮を建てる時はまだ来ない、と言っている。・・この宮が廃墟となっているのに、あなたがただけが板張りの家に住むべき時であろうか。」これはユダヤ人がバビロンから帰還して、神殿を再建し始めたのですが、徹底的な阻止行動によって中断せざるをえなくなったことが背景です。そして、自分たちは主のことに関わるのではなく、自分の家を建てていました。自分のこと、自分の仕事をやっていた。ところが空回りしています。そこで、主が預言者を遣わされたのです。まだ主の宮を建てる時は来ない、と言っていると言って叱責されました。ここで、私たちは今の状況を見て、「まだ、主が関わってくださる時は来ていない。」と言っています。いいえ、今、求めるのです。熱心に求めるのです。その中で霊的に建て上げられ、主の働きを受け取る心が整うのです。

2B 恵みの雨

それで、「**正義をあなたがたに注がれる。**」と主は言われます。新共同訳では、「**恵みの雨を注いでくださるように。**」となっています。主が訪れる時、主が恵みをもって臨まれる時があります。神は人間の歴史の中で、ご自分の霊を御心のままに注がれてきました。ヨエルが、「その後、わたしは、わたしの霊をすべての人に注ぐ。(2:28)」と預言しましたが、はたして五旬節の時に弟子たちが心一つになって祈っていた時に、主がそのことを行なってくださいました。イエス様は、仮庵の祭りの時に、「ヨハネ 7:38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」主が、ご自分のなされるままに御霊による恵みを注いでくださいます。

そしてその時に大切なのは、私たちがしっかりと種蒔きと土の耕しを自分たちに対してしているのかどうか？ということでもあります。今、もし日本の大体的な御霊の注ぎがあつたらどうなるでしょうか？それは素晴らしいことですね、次々と教会に新しい人々が来ます。バプテスマを受ける人が、一年に数名ではなく、毎週の数名が与えられるとします。そして、それぞれの人がもちろん不完全であり、霊的に、信仰的に赤ちゃんです。自分とは相いれない社会的背景の人が沢山います。その時に、私たちは、「自分とは異なる人、異質な人を受け入れるまでに成熟」しているでしょうか？「教会を自分にとって心地よい場にはならず、他者を絶えず優先させ、愛によって建て上げる場になっていく」ことに心備えがあるでしょうか？今、主を求めなさいという命令には、こういった背景があるのです。

1970年初頭に、米国の教会でイエス革命と呼ばれる大覚醒、リバイバルが起こりました。反体制の文化を持っていた十代の男の子、女の子たちは、フリーセックスや麻薬に溺れていました。け

れども、愛や平和を求めていました。そんな人たちの中でイエス様を信じる人々が現れました。チャック・スミスとその妻ケイは、ヒッピーたちがいる海岸の近くにいて彼らのために祈っていました。すると、自分の娘がヒッピーだけれどもクリスチャンになった彼氏を連れてきました。そして、ロニー・フリズビーというヒッピーの信仰者と出会いました。彼が後に、伝道者として用いられる器となっていく。そして、教会はヒッピーで一杯になったのです。そこで、以前から教会にいる人々には葛藤がありました。じゅうたんを海岸の砂浜を歩いていた裸足で入ってくるので、そこに付着している不純物がじゅうたんに粘りつきました。聖餐式のカップを置くために、椅子に穴があるのですが、その穴に足の指を突っ込む子もいました。それで以前からいた人々は、どのように愛によって彼らを受け入れればよいのか悩んだのです。ある時に、「裸足のまま、教会に入るべからず」という看板を掲げました。チャックがたまたま朝早く来ていて、それでその看板を取り外しました。彼らを集めて、こう言いました。「もし、絨毯が汚くなるから彼らがこれなくなるのであれば、絨毯をはがしてコンプリートの床にすればよい。」こうした葛藤を経て、若い子たちがイエス様に会い、イエス様にあって成長していったのです。

そのような恵みの雨が降ったのですが、けれども彼らが愛をもって若い子たちを受け入れたから可能だったのです。彼らがそのように受け入れることができたのは、御言葉による整えがあったからです。牧者チャックは、聖書を一節ずつ、しっかりと会衆に教えて行っていました。それで、彼らはしっかりと霊的に整えられていました。それで、自分のためではなく、主のため、他者のために仕える用意ができていたのです。

そこでお読みしたい聖書箇所があります。しっかりと種蒔きをする人、つまり主に与えられた賜物や財産を熱心に分けあたえていく人々がどのように豊かにされていくのかを描いている箇所です。「2コリント 9:6-11 私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。「この人は散らして、貧しい人々に与えた。その義は永遠にとどまる。」と書いてあるとおりです。蒔く人に種と食べるパンを備えてくださる方は、あなたがたにも蒔く種を備え、それをふやし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して、神への感謝を生み出すのです。」豊かにされる生活とは、このようにしっかりと種まく者、分け与えるもの、施す人です。それは自己実現であるかのように、自分のしていることを捧げるのではなく、教会として主に語られていること、命じられていることに何でも仕えて行く、従っていく捧げ物であります。